

# 一画業兵の従軍記 画家・斎藤千代夫の戦場

佐野賢治

Dairy from Battlefield by an Artist-soldier: The Battlefield of Artist SAITO Chiyoo

## ①はじめに

## ②略歴

## ③作品

## ④おわりに

### 【譜文要目】

画業兵という兵種はない。しかし、戦地においても画家でありたいとの信念を一時も忘ることなく、その特技を認められ戦闘詳報班に属し、軍務の間のわずかに許された時間を使って人物像や戦地の民情・風景を描き、およそ八百点のスケッチを必死の思いで持ち帰り、アルバムに貼り付けただけの私家版『北満従軍画集』三巻にまとめた丘隊がいる。山形県米沢市在住の斎藤千代夫氏である。

尋常小学校のころから絵描きにあこがれ、家業の没落から若くして異郷に出、実家に仕送りをし、その中で画業を学ぶ。軍隊入隊後は、絵描きの才能が活かされ、戦闘詳報班員として上官から重宝される。戦友はじめ慰安婦の求めに応じての人物像や、風土病に罹った現地の子どもやアヘン中毒の女を描いたスケッチを見ると、人間関係に対する信頼、庶民生活への共感とともに、斎藤氏の人柄、人間愛がにじみ出ているようである。また、風景画や民情を描いたスケッチは当時の時代背景を垣間見させて

くれる第一級の資料といえる。

「北満従軍画集」には、戦時の匂いがない。代わりに生身の人間の生活の匂いがある。戦地、戦場という非日常的な状況の中で、自己を失うことなく平常心を貫き通した兵士がいたこと、「絵描きになりたい」との初志を忘れることなく貫いた人の意志の強さの背景をここでは不十分な書き書きではあるが、戦地での一兵士の人物像を作品とともに描きたい。何よりも、戦争という非常時につつても自己を失わなかつた兵隊の存在の一例として紹介し、今後このような事例の発掘に努める契機としたいと考える。農民出身の兵士が軍事郵便で故郷の家族の消息とともに農事を必ず心配するよう、非日常時における日常性の持つ意味、非日常時における日常性の継続と断続を人間性のあり方とともに今後問題としてみたいのである。